

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2019年3月 NO.208

【もくじ】

- 2～3 音楽活動と少し裏話⑤—東日本大震災をきっかけに—宮地克也
- 4～5 高知県の「デザイントラベル」とは何か?…神藤秀人
- 6～7 俺らで、やってみよう!…岩佐晃忠
- 8～9 ただいま、ジャズ修行中…吉松孝洋
- 10 「アンテナ」川村慎二さんとの出会い…下尾仁
- 11 Kochi Art Messe —高知アートメッセ—
- 12～13 高知市文化振興事業団12～1月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

音楽活動と少し裏話⑤

―東日本大震災をきっかけに―

宮地 克也

あ、地震だ。そんな風に呑気に思っていたのが数秒、異様に長く、繰り返す度に大きくなる揺れにただごとではない事態なのを直感的に悟りました。二〇一一年三月十一日の昼下がり、この世の終わりが来たのかと思いました。少し落ち着いた後テレビをつけると、東北は信じられない景色になっていて、この大きな出来事をどう書き表せば適切なのか、未だに分かりません。ただ一つ言えることは、僕は東京でこの震災を経験したという事。東北での被災とは違い、周りの人が亡くなるでもなく、津波に飲まれる訳でもなく、避難所

で寒さと飢えと辛さに耐える訳でもありませんでした。だから、本当の被災とはかけ離れているのかもしれないですが、あくまでも自分の体験としての震災を書かせていただきます。十一日の夜、東京には沢山の帰宅難民が溢れていました。様々な情報や憶測が飛び交い、何が本当で何が間違いかも分からなくなりました。テレビからはCMが消え、色々なものが自粛モードで中止になり、スーパーやコンビニからは物が無くなりました。今まで生きてきた中で一番心の寒い春を迎え、今後の価値観を変えらる二つのことに気付かされました。

一つは、都会には人が沢山いても命や生活の生産能力はないということ。自然の在り方からは大きくかけ離れた、その無機質さに少し疑問を抱き始めました。

二つ目は、芸術や娯楽の価値に止まるライブやイベントに音楽の無力さという一面を新たに知りました。芸術や音楽は、一般的に大別するとやはり娯楽の範囲で、命の安全が保障されて衣食住が整った上にあるものだと感じたのです。この時感じたことは今でも深く根付いていて、ミュージシャンは「生かされている存在」なのだ

と思っています。だから、出来るときに出来る範囲で何かの役に立てたら…と思っていて、今でも三月に行うライブなどでは収益の一部を、その時々何か役に立てるようなことに寄付させていただいています。また、そうしたチャリティライブや復興支援に関して意見が入り乱れる中心に残ったのが、「やらない善よりやる偽善」という言葉。こちらの心情ではなく、困っている人の助けになること。シンプルにその一点でいいのだから、思わせてくれる一言でした。

高知でも近い将来、南海大地震の被害を受けることが想定されています。被災したときに自分は何が出来なのか。今はそんなことも考えながら、ヒゲンジツシユギの活動の他にミュージシャンのプロデュースやレッスン、楽曲提供、レコーディングやアレンジのお仕事、音響・照明・企画・台本・ステージ内容まで含めた各種イベントの総合プロデュース、かつて代官山で開いていたような月に一度

の主権の音楽イベントの開催など、
沢山の活動をしています。

音楽というフィールドから派生
して、自分の遣り甲斐を感じる仕
事は、空間、時間、プロジェクト
や人など何かを演出したりプロデ
ユースすることなんだと知りまし
た。そういう意味で、自分たちが
ライブをすることも更に楽しくな
ってきています。現状では全くノ
ウハウを持っていませんが、いつ
かミュージカルとかしてみたいと
ほんやり思い描いています。

今の目標は三つ。一つ目はヒゲ
ンジツシユギとして、今より良い
ライブや音楽を、もっと多くの人
に届けること。二つ目は、色々な
お仕事の受け付けやプロデュース、
楽曲制作で関わるミュージシャン
の所属事務所としてプロダクショ
ンを設立したので、色々な角度か
ら活動や運営のお手伝いをして出
来ることを増やすこと。そして三
つ目。これはミュージカルの件と
同じで現状では雲を掴むような話
ですが、高知に音楽フェスを作る

こと。知識も経験も実力も、何も
かも足りていませんが、しばら
くこの夢に近い目標をメンバーた
ちと追いかけてみたいと思います。

東京から高知に拠点を移すにあ
たり、東京在住の家族を心配しな
がらも「高知好きですし、高知に
住むの夢だったんでいいですよ。
米うまいですし、釣り出来ますし」

と高知への移住を決めてくれたは
るや。まあ、はるやのことだから
僕が何を言い出すか、言い出した
らどこまでも引つ張られるのは承
知済みで、とっくに覚悟は出来て
いたのかもしれない。ありがと
うはるや。振り回してすまん、と
いうか振り回されてくれてありが
とう。はるやが移住してからは沢
山の観光イベントのオフアをい
ただいたり、メディアに取材をし
ていただいたり、例年のように人
権コンサートで学校を訪れたり、
ツライイスさんや色々な方々と一
緒になって高知のパフォーマー大
集合でイベントを開いたり、よさ
こい祭りやCMソング等の提供曲

を作ったりと、何だかんだ慌ただ
しく過ごしています。

また、未だにうつ病の症状が酷
くなることも多々あり、精神的な
負荷がかかる過呼吸やら不眠や
ら色んな不調に見舞われることも
多いが、上手く付き合いながら一
緒に生活をしていてくれる妻。僕
と僕の仕事を理解して共に戦って
くれる有り難い存在です。

そして、高知の自然や暮らし。
高知へのUターンを決めた理由の
ひとつでもあります。高知は人間
らしい人間を育める、素晴らしい
場所だと思います。これは音楽を
する上で、心にも体にも重要な
ファクターではないでしょうか。

技術の進歩で、もう音楽活動を
するのに場所は選ばない時代にな
った現代。高知に居ながらでき
ることも少しずつ増えてきましたが、
この先A Iの進歩によってスマー
トフォンアプリくらいのレベルで、
シチュエーションに合った名曲が
バンバン生み出されるようになる
と思っっているの、モノを作るの

ではなく、価値を創造できるよう
になれたらいいなあ、なかなか大
変な時代だなあとこれからの想像
しています。

複数号にわたって書いた文章、
振り返ればただの異様に長い自己
紹介のような気がします。何の面
白みも無かったかもしれませんが、
音楽の世界や書かれている内容の
どれかひとつでも、読んでくださ
った方が興味を持ってくだされば
幸いです。

みやじ かつや

一九八四年生まれ、大月町出身。
大月町役場を退職後ミュージシ
ヤンに転向。現在はヒゲンジツ
シユギのボーカルとして活動中。

高知県の「デザイントラベル」 とは何か？

神藤 秀人



今から、十年以上も前のこと。

* 本誌『d design travel』の発行人でもあり、私たちが「D&D DEPARTMENT PROJECT」の創設者でもあるナガオカケンメイが、故郷・北海道を訪れた際、まだ見ぬその土地の素晴らしいものづくり^①に、深く感銘を受けたと聞きました。北海道といえば、日本でも一、二位を争う観光地。デザインの仕事を数十年してきた人間が、なぜ、そんな日本を代表する土地に目が向いていなかったのか。そして、なぜ、その時、感動したのか。正確には、目が向いていなかったわけではないと思いますし、正直、目が向いていても、気づかないことだってあります。昔から続いている「その土地ならではの文化」は、その

土地の人には、当たり前のこと過ぎて、ややもすると忘れてしまいがち。昔はこうだったな、あの時は良かったな、などといった記憶を振り返る場面は、誰もが あると思います。そして、それは日本中の「地域」にも言えることで、高知県も例外ではありません。高知県でしかできないこと、高知人にしかない気質。そういう視点を持つて旅することが、僕たちよそ者の『d design travel』編集部役割なのです。

二〇〇九年に北海道号から創刊した『d design travel』には、以下のような約束があります。まず、取材の際は必ず実費で利用すること。感動しないものは取り上げないこと。問題があっても素晴らし

ければ、その問題を指摘しながら薦めること。ロングライフデザイン^②の視点で長く続くもの、長く続いていってほしいものを取り上げること…など。これらを守りながら、約二カ月間、その土地に住み込みながら取材をしていきます。そうすると、自ずと「その土地らしさ」、つまり「地域性」が見えてきます。旅の最初は、どこかの飲食店に入っても何を頼んでいるものかわからず、隣の客が食べているものを、これみよがしに真似して注文したりもします。それを繰り返していると、だんだんと体も心も、その土地に根づいてくるのです。

例えば、高知市にある居酒屋「葉牡丹」では、最初は串揚げにはじ

まりますが、常連になると、実はオムライスやもやし炒めが人気だったりします。高知を代表するフードコート「ひろめ市場」では、行列のできる「明神丸」の鰹のたたきが定番かと思いきや、ぜんざいが美味しい店があることも知っています。人と出会い、友人もでき、お気に入りの店もできて、使う言葉だって変わってくる。伝統的工芸品である「土佐和紙」と「土佐打刃物」にしたって、若者にはほとんど使われていない印象も受けるなど、一泊二日程度の観光では、なかなか「気づきにくい高知県」を知り、少しずつ染まっていく。しかし、染まりすぎず、あくまでよそ者の視点を持ったまま、情に流されないように、一定の距離感をもって接していく。そうやって、約二カ月間、高知県を旅しました。

今思えば、高知県の個性を見つめるのには、それほど時間がかからなかったと思います。それは、高知県に根づく「おきゃく文化」に代表される、世話焼きの県民性があったからのことでしょう。スツと懐に入ってきて、「おまん呑みゆうかー！」と何度呑みに行っ

たことか。揉めごとや嫌なことも、持ち前の明るさで一気に笑いに変えてしまう。北に四国山地、南に太平洋といった大自然に隔離される土地だからこそその団結力、協調性、そんな清々しい平和感が漂っていたのです。

「デザイントラベル」というからには、デザインがないものは、本誌で取り上げることができませんし、そもそも、どこにでもあるような「お洒落カフェ」や「美味しい店」には、旅先では行きません。もちろん、そうしたお店は、地元の人にとっては必要な場所でしょう。「[d design travel]」では、以下のような基準を持って、取材先を選定しています。

- ・その土地らしいこと
- ・その土地の大切なメッセージを伝えていること
- ・その土地の人がやっていること
- ・価格が適正であること
- ・デザインの工夫があること

簡単なようで、難しい。かつて、ナガオカが、なぜ、知らない「ものづくり」に感銘を受けたのか。そこにヒントがあります。もちろん

ん、高知県にも日本全国にも、伝え残していきたいものづくりがあります。その技術や歴史だけでは、廃れてしまう傾向にあります。しかし、最近では、「過疎化」という言葉よりも、「移住」や「Iターン」といった言葉をよく耳にし、それはこうした「ものづくり」に価値を見出した人が多くなってきた、という時代の流れでもあります。若者たちによって地方は再構築され、ネットやSNSなど、現在の社会にも相性のいい方法で、生まれ変わってきている。私たちは「デザイン」を、ただ「カッコいい」ではなく、「創意」あるものとして定義し、「ロングライフデザイン」という、その土地に長く続く、愛されていくものを探しているのです。

そうした視点で高知県を見てみると、とても独創性のあるデザインが多かったように思います。また、都会的なデザインはもとより、東京などの有名デザイナーや建築家の仕事は、ほとんど支持されていないようにも思えました。高知県のデザインは、デザイナーだけがしているのではなく、生産者や生活者といった、地域も一丸とな

ってデザインしているからでしょう。「一次産業×デザイン」の奨励者、デザイナー・梅原真さんの存在も大きい。「砂浜美術館」や「84はちよんプロジェクト」など、「デザイン」の現場、ではもちろんのこと、県内の飲食店でも、梅原さんの名前をよく聞きました。みんなから愛嬌込めて「梅ちゃん」と呼ばれていて、坂本龍馬やジョン万次郎といった歴史上の人物以上に、デザイナーが地域住民に親しまれている。どこかそれは、デザインの仕事に携わっている人からしてみたら、とても羨ましくも思いました。もはや梅原さんは文化人で、「地域デザイン」とは、高知県の文化でもありました。

バケツの底が抜け落ちたように、誰かれ構わず酒を酌み交わす「おきやく文化」。何かを溜め込むフィルターも着けず、楽観的な思想を持ち合わせながらも信念を貫く県民性。だから、その分いつも元気で明るかった。グローバル化が当たり前になる日本で、地方にこそ、日本を元気にする手本がある。みんなで解決しよう。今いるヒトと、今あるモノで、幸せはいくらでも生むことができる。そう、高

知県のデザインは、伝えているようにでした。



3月19日全国発売
「d design travel KOCHI」表紙
食パンを持ったパタコさん
©やなせたかし

※「[d design travel]」：ロングライフデザインをテーマに活動するD&DEPARTMENT PROJECTが、四十七都道府県それぞれにある、その土地に長く続く「個性」「らしさ」を、デザインの視点から選り出し、一県ごとに一冊に編集、観光ガイドとしてまとめたもの。最新の高知号は二十五都道府県目となる。

しんどう ひびと

一九八〇年生まれ。

「[d design travel]」編集長。同誌の編集・執筆・写真撮影など制作全般のほか、渋谷ヒカリエで開催する同誌と連動した展覧会の構成も担当する。

俺らで、やってみよう!

岩佐 晃忠

が不要になるだけでなく、クーリーにとって何の前進にもなりません。神戸拠点で活動を続けるクーリー。関西では大きなホールライブの経験もありますが、基本、通常の活動ではすべて自分達でライブを段取っています。

公共のホールでの単独ライブとなれば、会場の手配から始まりプロモーション活動もさらに一時間二時間、音楽を作って歌う以外の仕事大量に降りかかってきます。クーリーが普段ホールライブを積極的にはやらない背景にはそういう事情もあります。

でもそれでは、彼らの活動も頭打ち。新しい局面などやってきません。だからこそ僕らが動くのです! 大きなハコで、クーリーには負担なく、普段見えない景色の中で歌ってほしい。古くからのファンの方にもホールの空気感の中で躍動する彼らを楽しんでほしい。そうすれば、きっと新しいファンが増えていく! その想いこそが、ホールライブにこだわる理由です。

こうして、僕の中では大義名分

二〇一七年、高知。「クーリーハイ ハーモニー」のライブ鑑賞後、友と交わした居酒屋バナシ。「いいライブやった」

「でももっと大きいハコでもっとお客さんの入ったヤツ見たいよなあ」

「それよ」

「俺らでやってみようか」

「やる? やれるか? やろうや!」

ライブ後の興奮もあった。いい感じに酒も入った。調子に乗った会話だった。それでも、もともと音楽関係は好きなことだし、その場のノリだけで消え去る話には終わりませんでした。

とはいっても、本当に素人に見えるのか。色々なミュージシャンのライブは見聞きしてきて、イベント業務は本職ではありません。会場手配、広報活動、ファンの新

規開拓。不安は膨らむばかりです。そんなとき背中を押してくれたのが、僕も参加してきた高知街ララ音楽祭実行委員会の仲間でした。

「悩むくらいならやってみい」

その言葉に背中を押してもらい、ライブの主催なんてやったことがない完全素人の僕らの活動がはじまりました。

で、なぜ「クーリー ハイ ハーモニー(以下、クーリー)」なのかというところ。

彼らは、神戸を拠点に全国で活動している四人組ボーカルグループで、高知のメディアにも出演経験が多数ありますが、リーダーの大石学が小学校からの同級生なのです。そして、僕らの母校である高知市立追手前小学校の閉校時に記念ソングを作ってもらったこと

から、他のメンバーとも仲良くなくて。もちろん、彼らが奏でる心にそっと寄り添うハーモニーにも魅了されて、一ファンになったからというの大きな理由です。

このプロジェクトの目指すところとして決めていることがあります。何よりホールライブの実現。

そしてそのために、一人でも多くの人にクーリーを知ってもらおうことです。

でもどうして、ホールでのライブなのか?

初めてのチャレンジなんだし、ステージ周りがオールインワンでできるライブハウスでやれば、という意見もありました。大きなハコを用意するリスクはやはり相当なものですが。ただそれだと、僕らが手を出さなくてもできてしまいます。僕らにとってのチャレンジ



左から4人がクーリー ハイ ハーモニー、右手前が筆者。小学校の恩師もメンバーとして活動しています。

が立ち上がりました(笑)
 さあ、何よりもまずはメンバーを集めて団体を作ることから。うれしいことに、同級生たちは快く賛同してくれ、あっという間に実行委員会としてのカタチが出来上がりました。

ただ、問題がなかったわけでは
 ありません。作戦会議を開こうにも、なかなか集まらない。賛同はしてくれても、このプロジェクトへの熱量はそれぞれだし、同級生メンバーは、僕も含めて、子育て世代真っ只中。簡単には集まらない。集まれるわけがない。たしかに、予想していたことではありま

した。

さらに、この実行委員会は仕事ではありません。目に見える報酬がありません。みんなの好意があつてこそそのボランティア。ただの自己満足だという冷めた見方もありました。が、たしかにそのとおり。得られるとすれば唯一「達成感」や「満足感」です。それらを最大限に得るために、実現に必要な色々な事柄に心をくばり全力で動く。趣味の範囲で！(笑)

じゃあこういう時どうするか？それは動ける人が「無理をする」と(笑)。

誰かが走っていないければ前には進めない。そしてみんなにもできる範囲で動いてもらい、「想い」はいつも共有していく。これしかない。僕は思います。

今回このプロジェクトをはじめから、僕の中ではやりたいことがどんどん出てきています。それを実現するにはどうすればいいのか？それを考えるのが楽しくて仕方がない！

クーリーのメンバーも全面協力、僕らと一緒に動いてくれています。このライブに向けて行わ

れた商業施設でプロモーションも好評で、回を重ねるたびにお客さんも増えていきます。

まずは知ってもらうこと。そして、次につなげること。

こうやって目に見えるかたちでクーリーの音楽が広がっていくことがホントに嬉しく、それができるチカラを秘めたクーリーのことを誇らしく思います。

ライブ帰りの飲み屋で始まり、かけがえない仲間の協力を得て作り上げてきたプロジェクト。本番まで、スペシャルなカタチを目指して、あと三カ月。

そして、そこにたどり着いても、それが僕らのゴールではありません。その先の景色をさらに求めて、「クーリー ハイ ハーモニー」と一緒に進んでいきます。



菓子処 青柳 presents
 Cooley High Harmony Special LIVE in 高知 ～Hello, My Home!～

2019年6月8日(土)
 会場 高知市文化プラザかるぼーと 小ホール
 主催 CHH ホールライブ高知実行委員会
 チケット情報など、くわしくは公式特設サイトにて
<http://rc-yoshioka.com/cooley.html>



いわさ あきたた

一九七七年生まれ。

CHHホールライブ高知実行委員会の他にも、高知街ラ・ラ・ラ音楽祭実行委員会のメンバーとしても活動中。

ただいま、ジャズ修行中

吉松 孝洋

でした。

年齢が三十代になった頃、現在の会社に就職したことを機に、自分が本当に好きな音楽を勉強したい、との思いから東京の先生にレッスンを受けることになりました。

先生は安保徹さんといいます。

安保さんは日本を代表するビバップスタイルのテナーサクソ奏者です。

レッスンの前日、埼玉のジャズ喫茶で開かれるセッションに参加するために浦和市の与野駅に行きました。駅のエントランスで初めてお会いした安保さんは大柄な方で、握手をしてもらった手もととても大きかったことが印象に残っています。誰かの紹介で訪ねてきたわけでもない私に気さくに温かく接してくださり、そのお人柄にも感動しました。

埼玉でのセッションはカルチャーセッションでした。みんなアマチュアなのに上手い！スタンダードジャズの名曲をさらっと、CDでよく聴くフレーズも織り交ぜながら

はじめまして。テナーサクソ

を演奏している吉松といいます。

今回は私が取り組んでいるジャズ演奏と私の大好きな演奏家について皆さんに知っていただきたいと思いい、ペンを執りました。

本題の前に私の音楽遍歴について少し説明させていただきます。

私は十代の頃からロックを聴き始め、エアロスミス、キッスなどのアメリカのハードロックが大好きでした。黒人音楽の魅力はレイ・チャールズで知り、ブルースやジャズなども聴くようになりまし

た。

聴くだけではなく自分でも楽器をやってみたい、という思いを持っていたので、社会人になったことを機にお金を貯め、以前から憧れのあったサクソスを買いました。

なぜサクソス、それもテナーサクソにしたのかといいますと、ローランド・カークという奏者に憧れていたことでした。カークの演奏には、様々な黒人音楽のエッセンスとロック的な激しさがあり惹かれました。また、私が勉強したいビバップジャズの楽しさを教えて

くれたのもカークの演奏でした。

楽器を買い、楽譜を読めるようになったものなから勉強を始めたらいのか……。ということでも、楽器屋さんでレッスンを受けるようになりまし。クラシックの研究を積んだ先生から、サクソスの大事な基礎を教わりまし。

サクソスを始めて五年程経ったころから、ロックバンドやビッグバンドで演奏させてもらうようになりまし。十代の頃にバンド活動や吹奏楽を経験してない私は、とても楽しくためになる経験

ら演奏しているのです。私はシンブルなブルースの曲で参加しましたが、もったときちんと勉強したい、との思いを新たにしました。

セッションでは安保さんの演奏もたくさん聴くことができ、『ボデイ・アンド・ソウル』『イースト・オブ・ザ・サン』といった曲が演奏されました。初めて生で聴く安保さんのサクソスはまるで歌うかのような滑らかさで、その音色にも感動しました。

翌日、セッションが終わった後に居酒屋で色々なお話をしていたできました。何年も休みの日がないほど売れっ子だった安保さんは、体調を崩して入院されたこともあったそうです。その後、好きではない音楽も演奏しなければならぬ毎日に疑問を感じて演奏活動を休止。別の仕事をされていたこともあったと聞き、純粹にご自分の音楽を追求するその姿勢に感銘を受けました。以来、隔月で東京に行きレッスンをしていただいています。

高知に帰ってきてからは、吉川英治さんがマスターを務めるジャズ喫茶「木馬」に行くようになり、高知さんの活動拠点であり、高知を代表するジャズミュージシャンが集まるお店、木馬。それまでは入る勇気の出なかったお店でしたが、「ジャズを勉強するためにはここに行くしかない！」と決意し、重い扉（歴史ある建物なので、実際も重たいのです）を開けました。

初めてお話をさせていただいた吉川さんはとても気さくな方で、「今度のライブでセッションしよう」と仰ってくださいました。木馬のバンド「トロイスターズ」のライブでは、第二部にセッションがあるのです。第一部の名演を聴きとても緊張しましたが、当たって砕けるの精神でブルースを一曲演奏しました。終演後はメンバーの皆さんも私を面白がってください、以来毎月セッションに参加しています。

吉川さんの演奏は大好きでそれ

まで何度も聴いていましたが、改めて感じたことは、「歌うようにドラムを叩く方だなあ」ということです。一緒に演奏をさせていただきながら、ジャズのリズムと言葉で歌う吉川さんのドラムにいつも感動しています。また、吉川さんが『リン・オン・ミー』や『港町』といった曲でボーカルをとることもはじめて知りました。その歌も粋でとても格好良いのです。歌心を持つことの大切さを吉川さんの演奏から教えていただきました。

さて、来る四月に安保さんと吉川さんが共演するライブがあります。

安保徹 ライブ・アット・木馬

■四月十二日（金）出演者

安保徹（ts）・西村まきこ（Pf）・

西村公孝（b）・吉川英治（ds）

■四月十三日（土）出演者

安保徹（ts）・高崎元宏（Pf）・大

村太一郎（b）・吉川英治（ds）

両日とも七時開場、七時半開演

前売り三千円、当日三千五百円
バンドメンバーも高知を代表する素晴らしいミュージシャンの皆さんです。とても楽しいライブになること請け合いですので、ぜひ木馬にいらしてくださいね。



よしまつ たかひろ

一九八三年高知市生まれ。
トロイスターズ、安田貴トリ
オ、チリコンカーン、長浜銀蠅、
チェッカー部、の諸先輩のもと
で勉強中。

「アンテナ」

川村慎二さんとの出会い



下尾 仁

周波数を合わせれば、いろいろな人と出会い繋がることができる。アンテナを高くたて沢山の人と繋がろう。

平成十一年に参加した市民ミュージカル『光の中で』で出会った川村慎二さん。その後、彼とは数々のパフォーマンスを一緒に繰り広げていくことになる。

正直、『光の中で』の練習中の彼はまったく印象に残っていない。彼をはっきりと認識したのは『光の中で』の公演を終え、その中のメンバー数人でなにかをやるうと「ばるび〜ちゃん」というパフォーマンズグループを結成した。

その中にやたらダンスが上手く面白い人がいた。それが彼、慎二さんだった。

よくよく考えると、『光の中で』の時は、一緒にシーンはほとんどなく、話をするともなかったのだ、こんなにも面白い人だと気付けなかったのである。

ばるび〜ちゃんですまず何をしようかとなり、とりあえず高知の夏の風物詩、テレビ高知の「歌って走ってキャラバンバン」に参加しようということになった。そして何故だったか忘れたが、僕は慎二さんと二人で参加することになった。初出場のキャラバンバンは、赤岡の天然色劇場。慎二さんはタキシード、僕は羽織袴で少年隊の『仮面舞踏会』を熱唱した。会場を最も沸かした出場者がもらえる「キャラバン賞」狙いだだったが、結果はまさかの準優勝!!これにはほんとにビックリで、二人で目をパチクリしてしまった。

他のメンバーも、一人が東洋町大会で準優勝、二人組が中央公園大会でキャラバン賞、そしてこのキャラバン賞を受賞した二人組が全大会で三組しか選ばれない決勝大会出場を決めた。決勝大会本番では、ばるび〜ちゃんメンバーが慎二さんのなんとも奇妙な振り付

けのバックダンスで二人を盛り上げ、キャラバン大賞を受賞!!ばるび〜ちゃんの快進撃であった。それからは慎二さんとのコンビで毎年のようにキャラバンバンに出場し、そしてキャラバン賞も毎回のようにならないうちに、決勝大会も三回出場したうち、二回大賞を受賞という結果をのこした。

もちろんキャラバンバンだけではなく、慎二さんとはいろんなパフォーマンスをさせてもらった。得月楼では坂本龍馬をモチーフにした劇、土曜夜市では大丸前でキリストをモチーフにしたパフォーマンス、CMやテレビ番組など声がかかればどんな所にも出向きいろいろなパフォーマンスを披露させてもらった。

二人での活動だけでなく、慎二さんはソロでも活動。かるぼーとの開館を記念して制作された第五十四回高知市文化祭開幕行事の市民ミュージカル『RYOMAの夢』では主役の龍馬役を、翌年の開館一周年記念の開幕行事、市民創作演劇『純信・お馬』では髪を剃り上げて純信役を演じたり、お芝居にバレエに幅広く活躍していた。

ある年、高知県がおもてなし隊を作るのでオーディションをするとの話に、慎二さんは、オーディションを受けるので僕にもどうかと誘ってくれたが、僕は乗り気になれず断った。慎二さんはもちろん

ん合格。「土佐おもてなし勤王党」と名付けられたグループで、慎二さんは中岡慎太郎を演じることに。高知駅前前のステージで土・日・祝と歌い踊りパフォーマンスをする。慎二さんは、キラキラと輝きを放ち、ファンが県外からも訪れるほどの人気で、いつも一緒にパフォーマンスしていた慎二さんがなんだか遠くに行つたような寂しさもあつたが、それと同時に僕も頑張らなければと多々思わされた。

土佐おもてなし勤王党は人気で、一年だけの活動予定が途中でメンバーやグループ名を変えながらあれよあれよと八年も活動が続いている。二〇一九年三月末、その活動も惜しまれつつも終了とのこと。本当にみんなに元氣と笑顔をくれてありがとう。

活動終了は悲しいが、中岡慎太郎から解放された川村慎二さんの今後の活動が楽しみである。そしてまた二人でパフォーマンスが出来ればと思つたりしている。

しもお ひとし

一九六九年生まれ
岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

Kochi Art Messe

「高知アートメッセ」

高知の若手美術作家の作品展示と販売を行う企画展「高知アートメッセ」を、二〇一九年一月七日（木）～二十日（日）、高知市文化プラザかるぼーと市民ギャラリー第一展示室で開催しました。

この事業は、これからの高知の美術文化を担う若い世代の作家の応援を目的とし、作家を多くの人で紹介する場であるとともに、単なる鑑賞だけではなく、来場者に色々な美術の楽しみ方を提案する場となることを目指し、美術のフアンを地域に増やしていこうという取り組みです。高知市文化振



興事業団ではこの事業の企画にあたり、若手作家が制作を続けていく上での様々な課題について考える中で、「作家」とその作品を「見る人」の関係性に着目しました。高知では多くの若い美術家が精力的に制作に取り組んでおり、個展やグループ展の自主開催、コンクールへの出品など、柔軟な発想力と感性溢れる作品を積極的に発表しています。作家にとって作品発表をする上での大きな収穫は、自身の作品が人の目に触れ、様々な角度から意見や反応を得ることであり、それが制作意欲の向上にダイレクトに響くことは言うまでもありません。しかし、実際個展などへ足を運ぶ人の多くは作家に近い人が多いことも現実です。もっと幅広く色々な人に作品を見てもらうにはどうすれば良いのかという課題は大きいと聞きます。

一方、そういった場に訪れない人たちに話を聞くと「アート（美術）は難解だと感じる」「作家を知らない」「会場に入りにくい」などという答えが返ってきます。先にも述べたように、作家がより精力

的に活動を行っていくには、作品を見た人の反応が作家へダイレクトに返ることが不可欠です。また「見る人」を増やしていくためには、作家の存在を知ってもらうこと、そしてアートは誰でも気軽に楽しめるものだというのを、様々な手法で伝え、その距離を縮めていくことが必要なのではないかと考えました。

その糸口を探る一歩として、本展では誰でも足を踏み入れやすいアートの関わり方として「好きな作品を飾って楽しむ」ことを提案しました。十六歳～四十歳未満の作家から公募した平面の小作品を展示し、全作品を購入可能な「見本市（タイトルに入っているメッセはドイツ語で見本市）」としました。販売価格は作家が設定し、来場者は好きな作品をその場で購入できる仕組みです。

会場には四十八名から寄せられた洋画、日本画、書、写真など百十一点を展示。高校生から三十歳代後半の長く制作を重ねてきた世代まで幅広い作家が参加しました。「見本市」であるため静かに鑑賞する必要はなく、仲間同士で「この作品はいいね」「欲しいけどちょっと手が出ない価格だな」など、自由に意見を交わす様子が見られ、各々が鑑賞を楽しんでいました。また会場には出品作家の姿もあり「他の作家の作品に刺激を受けた」



「作品が売れたことで今後の励みになる」などの声を寄せてくれました。売約になった作品は三十三点。購入者に感想や作家への応援メッセージをいただき、その声を作家本人に届けました。

今回のような企画を通して、今後、日常生活の中でアートを楽しむという文化が時間をかけてでも少しずつ育っていけば、今まであまり関わる機会がなかった地域のアートにも目を向けるきっかけとなり、人に関心を持たれることで作家の制作意欲にも良い影響を生むのではないかと。美術の「日常化」が作家への追い風となり、高知の美術文化を取り巻く環境が今以上に活性化していくことを願い、今回得られた成果や反省を踏まえ、今後のさらなる美術事業の展開を検討していきたいと思えます。入場者数 七百二十七名

12～1月の事業から

平成三十年度

市民学校年末特別教室

高知市立中央公民館では、年間を通じて「市民学校」「市民講座」「いきいきセカンド☆ライブ講座」など、様々な講座を開催しており、毎年十二月には、クリスマスとお正月に向けて、この季節ならではのテーマで「市民学校年末特別教室」を実施しています。

今年、「布花でつくるXmasアクセ」「ほっこり☆サンタのキャンドルリース」「お正月の着付け」「冬至とお正月の韓国料理」の四講座を開催しました。

布花でつくるXmasアクセ

自然の草木で染めた優しい色合いの布で、クリスマスローズのピンブローチを作りました。淡くて清楚な風合いの花びらは、大人のかわいらしさをひきかてます。

今年一年がんばった自分への小さなごほうびに、大切な人へのプレゼントに、心を温かくしてくれる素敵な作品ができました。

受講者数 九名

ほっこり☆サンタのキャンドルリース

手づくりでサンタクロースのキャンドルを作り、その思いがこめられ、ひとつひとつ違った表情のサンタは、見る人の心をほっこりさせてくれました。

木の実や綿のちりばめられたフレッシュリースに、ちよこんと座ったサンタさんは、まるで、森の中からのぞ



いているかのようにでした。
受講者数 十一名

お正月の着付け

初めての方でも、気軽に参加できる全二回の教室です。初級から応用編まで丁寧な個別指導していただける、毎年恒例の人気の講座となっております。帯の結び方も、基本的な結び方であるお太鼓から、文庫結び、貝ノ口などいろいろな結び方に挑戦しました。また、二回目の教室では、着物を着ているときの歩き方や、お辞儀の仕方などのお作法も教えていただきました。

受講者数 十九名

冬至とお正月の韓国料理

今年の講座当日は二十四節季の「冬至」。韓国では、幽霊が小豆の赤い色を嫌うということで、一年で夜が最も長いこの日に、鬼神を追い払うという意味で小豆粥を食べます。その他に、お祝いの席や、多くの客を招くときに作られる、伝統的な前菜のチャプチェ(雑菜)、干し柿などの甘味と生姜桂皮の刺激が味わえる、朝鮮伝統の飲み物スジヨングウア(水正果)、白菜キムチ(沈菜)の作り方を教えていただきました。韓国の日常の話を交え、楽しく、美味しい時間を過ごすことができました。

受講者数 二十一名

開催期間

平成三十年十二月十二日(水)
十二月二十二日(土)

会場

高知市文化プラザかるぼーと
高知市立中央公民館



バレエと音楽の出会い「Spring Special Concert in かるぼーと」

高知での活躍が著しいバレエスタジオ「Masako Ballet Works」と「RS Ballet Studio」が競演し、四国を代表するオーケストラ「四国フィルハーモニー管弦楽団」(指揮:酒井敬彰)と、ピティナクラシクス高知ステーション代表の門脇加江子(ピアノ)とコラボレーション。普段、お目にかかるとのことのないバレエと音楽の融合による本格的な舞台をお楽しみください。

日時:2019年3月10日(日) 開場13:30 開演14:00 終演16:00

一部 バレエとピアノ(門脇加江子) 30分 『レ・シルフィード』『タランテラ』『ドリーブ組曲』など
休憩 20分
二部 バレエとオーケストラ 60分 『眠れる森の美女より第三幕オーロラの結婚』

会場:高知市文化プラザかるぼーと 大ホール

料金:一般3,000円 ※未就学児膝上無料(ただし、座席を占有する場合は有料)

主催:RS Ballet Studio, Masako Ballet Works

共催:公益財団法人高知市文化振興事業団

お問い合わせ:公益財団法人高知市文化振興事業団 TEL:088-883-5071



高知市文化振興事業団

第187回市民映画会

平成三十一年一月二十四日(木)、二十五日(金)にかかるぼーと大ホールで第187回市民映画会を開催しました。

市民映画会は、高知では公開されていない文化の薫り高い劇場画を低廉で提供することを目的に、一九五一年に始まりました。これは高知市立中央公民館の発足と同時に期のことであり、これまでに三百七十五本の映画を上映しています。

今回の上映作品は「ロング、ロングバケーション」と「輝ける人生」でした。

「ロング、ロングバケーション」は、アメリカを舞台に七十代の夫婦がキャンピングカーで人生最後の旅に出かける話です。認知症・終活・尊厳死など重いテーマであるものの、限られた時間の中で夫婦の思い出を振り返りながら、残された時間を大切に生きる、キラキラしたラブストーリーのような切なさが心に染みる作品でした。衝撃のクライマックスにお客さまの感想も賛否が分かれるところではありましたが、日本とは違った終活・尊厳死の考え方・価値観を感じられることも映画鑑賞の良さではないでしょうか。自分のこと、夫婦のこと、親のこと、過去・現在・未来を思い、生きることを愛する勇気を与えてくれる良い作品でした。

もう一つの作品「輝ける人生」は、ロンドン、ローマを舞台にダンスあり大人の恋愛ありと楽しく、見ていて思わず踊りたく

なるような作品でした。いくつになっても人生を謳歌できる希望をもらいました。劇中に使われている「ロック・アラウンド・ザ・ロック」や「イン・ザ・ムード」などの楽曲を懐かしみ、映画鑑賞後に受付で曲のタイトルを確認して書き留めて帰られるお客さまもいらっしやいました。二作品とも、心の栄養になる素敵な作品でした。今後も、元気になる作品・魅力ある映画を上映していきます。ご期待下さい。

次回は、六月二十一日(金)、二十二日(土)に開催します。世紀の歌姫マリア・カラスのドキュメンタリー映画「私は、マリア・カラス」と、法廷社会派エンターテインメントの傑作「判決、ふたつの希望」をお楽しみに。



(入場者数) のべ四百五十八名

第35回写真コンテスト・高知を撮る 入選作品展

「記録写真部門」と「I LOVE 高知部門」にご応募いただきました324点の作品のなかから、特選4点、準特選20点を含む入選作品65点を展示します。

- 記録写真部門
 - ①平成の部
 - ②昭和以前の部
- 【高知県に関する記録性を持った写真】
- I LOVE 高知部門
- 【あなたの好きな高知の写真(平成30年1月1日以降に撮影されたもの)】

日時: 2019年3月19日(火)~24日(日) 10:00~17:00
会場: 高知市文化プラザかるぼーと 市民ギャラリー第4展示室
料金: 入場無料



見られなかった後悔



風俗歳時記

今年の正月は、例年になく好天気恵まれ、桂浜では珍しい「だるま朝日」に出会えたようだ。毎年桂浜まで初日の出を見に行っている隣人が、「今年は本当に素晴らしいかった」と、興奮冷めやらぬ様子で話してくれた。私も見に行けば良かった。

これまでも見なくて後悔したことはたくさんある。長女が大人用の水洗トイレで一人で排便できるようになった頃、「ものすごい長いウ○コが出たから来て来て！」とトイレの方から大声で呼ばれたが、料理中だったのと面倒だったので、手を止めてわざわざ見に行かなかった。「あゝあ。ウ○コさん、バイバイ〜！」と言って、娘は寂しそうに一人で流して

いた。遠くでその声を聞いていた私は、母としては失格だと後悔した。ちゃんと見て、褒めてあげれば良かった。

これと同格にはいけないが、コンテンポラリーの舞踏家として神様のよう存在のピナ・ハウシュが、十六年前に来高した。子育て中の家計から公演のチケット代を捻出するのに頭を悩ませていたら、あつという間に入手困難に。彼女はその後他界したので、二度と見ることはできない。ピナ・ハウシュは、私の「見られなかった後悔」の中ではトップスリーに挙げられる。当時の高知ではまたコンテンポラリーダンスはメジャーではないと高を括っていたが、よきこいが自由な振付で踊られる高知において、コンテ

ンポラリーを受け入れられる土壌は昔からあったのだ。思い立ったらGO、迷ったらGOでないと、たった一度きりのチャンスにお目にかかれないものは少ない。

英国ロイヤルバレエ団のプリンシパルを務め紫綬褒章を受章している吉田都さんの引退公演が、八月に東京で予定されている。十代の頃から応援してきた同世代の私としては、是非、最後の舞台は生で見たい。でも、よきこいの時期は自分の仕事も忙しく、いつものようにいろいろ言い訳していたら、また「見られなかった後悔」をしそうだった。

(立花香)



高知を撮る

第34回写真コンテスト入賞作品

嫁ぐ日の朝

(昭和41年3月 高知市仁井田)

窪田 洋一

現役の時、職場の方の娘さんが結婚との事で撮影を頼まれ早朝から門出まで撮影した。当時は式場での結婚式は少なかった。隣近所への挨拶、婚礼道具をトラックに積んだり、送迎バスの代わりにタクシーだった。現代の式場でのマニュアルどおりの結婚式はなんとなく怪しい。

武田真治 feat. Shiho with special guest K



俳優、タレントとしても幅広く活躍し、今、筋肉体操で話題沸騰中の人気サックス・プレイヤー、武田真治。

元Fried Prideのジャズ・ヴォーカリストとして、日本人離れした類まれな歌唱力を持つShiho。

さらに、実力派シンガー・ソングライターとして数々のヒット曲をもつK(ケイ)。

この豪華メンバーによる一夜限りのジャズライブ。武田真治のMCで会場は和み、ビブラートのきいたサックスと実力派シンガーの共演でボルテージは最高潮に。その自慢の筋肉も見られるかも。新元号になり新たな気持ちで挑むヒートアップしたステージは見逃せない。

【日 時】2019年5月2日(木)開場18:00 開演18:30

【会 場】高知市文化プラザかるぼーと大ホール

【入場料】全席自由 ※未就学児入場不可
一 般 前売り 5,000円(当日 5,500円)
高校生以下 前売り 1,000円(当日 1,100円)

【制 作】株式会社ステラキャスティング

【主催・お問い合わせ】高知市文化振興事業団 088-883-5071



2019年3月6日(水) 高知市文化プラザかるぼーと大ホール

開演19:00(開場18:30) 料金(全席指定)S席(1・2階)7,000円 A席(3階)4,000円 チケット発売日:2018年11月1日(木)

共演: 吉見一豊 吉見一豊 吉見一豊 吉見一豊 吉見一豊 吉見一豊 吉見一豊 吉見一豊 吉見一豊 吉見一豊

主催: 高知市文化振興事業団 高知市文化振興事業団 088-883-5071 http://www.bunkaplaza.jp

Le Père 父

フランス演劇賞最高位のモリエール賞 最優秀脚本賞を受賞(トニー賞とローレンス・オリビエ賞の主演男優賞を受賞)した、ある父を巡る哀しい喜劇(コメディ)― 誰にとっても身近な話 ―

フロリアン・ゼレールの最高傑作、30か国以上の上演で大絶賛を受け、待望の日本初演!

フランスオリジナル版を演出した気鋭演出家ラディスラス・ショラーが日本で初めて演出。父アンドレ役を橋爪功が、娘アンヌ役を若村麻由美が、二人の周辺の人々を実力派として定評がある今井朋彦と吉見一豊、元宝塚歌劇団トップスターの壮一帆、進境著しい太田緑ロランスが演じる期待作。

【日時】2019年3月6日(水)開場18:30 開演19:00

【会場】高知市文化プラザかるぼーと 大ホール

【入場料】全席指定
S席(1・2階)7,000円 A席(3階)4,000円

【お問い合わせ】高知市文化振興事業団 088-883-5071

今号の表紙

tanpopo

田中亜未架

季節にちなんだ植物でデザインしたいと思いタンポポを選びました。

3月の暖かい空気とタンポポの柔らかい綿毛が伝わるように暖色でまとめイラストをまだらに配置し、ポップでかわいらしいデザインにして誰にでも親しまれるような表紙にしました。

(たなか あみか / 国際デザイン・ビューティカレッジ1年生)

風伯

イセキ

みると、実は「モチイセキ」というのがあってねえ、それがなかなか痛いんだよ。エッ! 何遺跡? いくら年をとっていても「遺跡」とは言い過ぎだろう! と思いつつ話をよく聞いてみると、遺跡ではなく「胃石」のことだった。モチはモチロン「餅」のことである。医師友によると、硬くなった鏡餅などを食べ、やがてその餅が胃の中で消

年を重ねると、身体のあちこちにガタがくる。というわけだけではないが、いま三カ月一度定期健診を欠かさない。おかげで身体の異変もいち早く発見されてしまう。先日、健診のついでに、「お腹の具合が」と告げたのが、血液検査と尿検査の結果がすべてなの。後日そのことを親しい医師に尋ねて

た。自分の腹の痛いのも忘れて笑ってしまった。(霖)

化されずに「石」のように硬くなって悪さをするらしいのだ。確かに私は「餅」が大好きなのだが、今回の場合はその「石」ではなさそうだった。ところが、さらに重ねていうには「カキイセキ」というのもあるという。もうだまされないう。「カキ」は「柿」だそうで、「柿」も大好きである。ウソのような本当の話であるが、「餅」や「柿」が「胃石」になるとは人体はなんと複雑怪奇なんだろう。



企画制作◎高知文化協会
構成・演出・脚本◎吉本智賢子
舞台監督◎高橋啓継

安芸児童合唱団はまゆう、
劇団ゆまにて、劇団the創

終焉を迎えつつある龍太郎の妻ゆり。
今はじき龍太郎と四人の娘、
その周りの子どもたちとの
音楽に充ちた懐かしいひと時が、
いつそういとおしく思い出されるのだった。
出演／大正琴あじさい会、

「弘田龍太郎の わらべ日記」

第一部 音楽劇

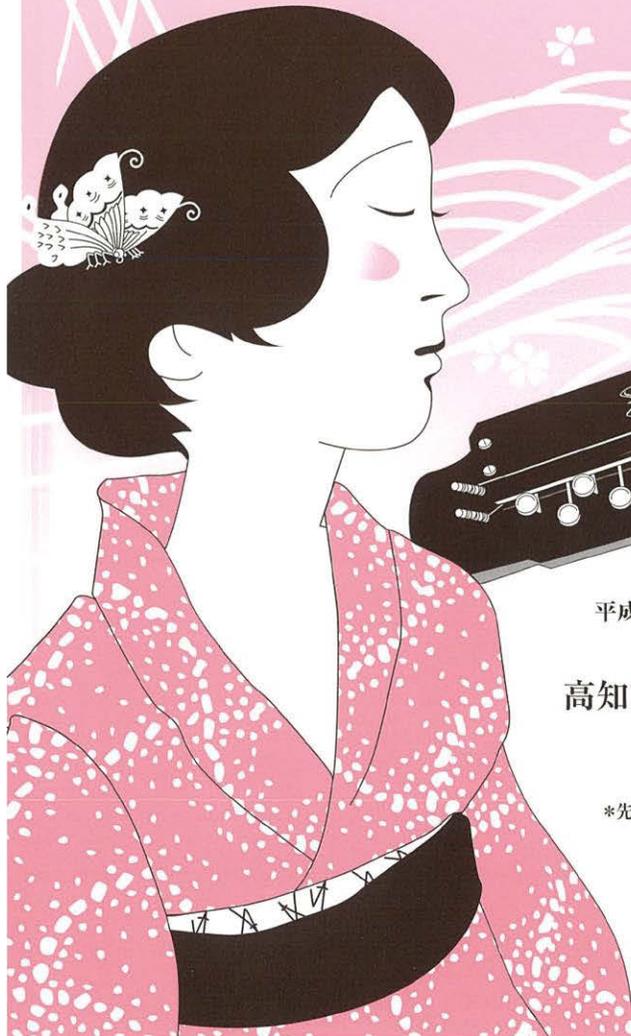
出演／大正琴あじさい会、
紫派・藤間流 藤間紫公、藤間公佳、
岡田直也、大井政子

「大正琴演奏」

第一部

大正琴でつつづる 日本の曲

第71回高知市文化祭開幕行事



平成31年 4月14日(日)

午後1時開場 / 午後1時30分開演

高知市文化プラザかるぽーと [大ホール]

入場料 無料

*先着300名様に大正琴あじさい会から手づくりのプレゼント贈呈

主催=高知市文化祭執行委員会・高知市文化協会・大正琴あじさい会
主管=公益財団法人 高知市文化振興事業団・高知市教育委員会
後援=高知新聞社・RKC高知放送・KUTVテレビ高知・NHK高知放送局
KSSさんさんテレビ

(お問い合わせ) 高知市文化振興事業団 TEL088-883-5071

かるぽーと 検索